「肉奴隷のお尻の穴にチ×ポを入れてあげてください。こうなったら壊れるまで、ここにいる全員で犯しまくるんです」

すかさずヒップが割り開かれて、裏門に亀頭が押し当てられる。秀夫は女体を抱きしめたままあお向けになり、サンドイッチの体勢を取りやすくする。

「ひッ！　あ……ああ……」

とろけていたアナルはいとも簡単に肉棒を受け入れていく。あっという間に根元まで挿入されて、目の前で極彩色の火花が飛び散った。

「ひいいっ……すご……苦し……くぅうっ」

蜜壺に肉棒を埋めこまれたまま、排泄器官を掘られるのは想像していた以上の圧迫感だ。肉がミシミシと軋み、今にも身体が真っ二つに引き裂かれてしまうような痛みが突き抜ける。

（え……エリカさん……）

思わず視線を泳がせると、そこでは肉に狂った淫獣たちが腰をぶつけ合って咆哮をあげていた。

焦点の合わない瞳で喘ぎ狂うエリカを、凄絶な笑みを浮かべた剛志と、目を血走らせた優弥がサンドイッチで犯している。さらに、その周囲では一般の男子生徒と女子

生徒たちがさまざまな体位で繋がり、淫らな嬌声を振りまいているのだ。

こうなってしまっては、もう人格などありはしない。誰もが淫らな肉の塊となり、本能のまま悦楽を貪りつづける。どこかで絶えずオルガスムスの声があがり、聖堂内には濃密な性臭が立ちこめる。相手を次々と代えながら、狂宴はいつ果てることなく延々と展開されていく。

「ひっ……ひいいっ……」

樹里もたまらず顎を跳ねあげて、絞め殺されるようなよがり声をあげていた。アナルに挿されたペニスが、ゆっくりと前後に動きはじめたのだ。

薄い膜を隔てて、逞しい二本のペニスがゴリゴリと擦れ合う。その異常な感覚に、樹里は四肢を痙攣させて悶え泣いた。

「くぉっ。すごい締まってきましたよ」

秀夫も興奮した声で告げると、猛烈な勢いで腰を突きあげる。すると肛門を犯している少年も、抜き差しのスピードを速めていく。興奮が興奮を呼び、三人は汗と淫汁を飛び散らせながら、無我夢中で股間をぶつけ合う。

「ひあぁっ、すご……擦れて……ひっ、ひっ……死んじゃうっ」

樹里が絶息しそうな声をもらして総身を震わせた。しかし野獣と化した男たちは、

欲望のままに肉棒を出し入れする。その様子を見ている生徒たちも一緒になって昂り、それぞれの相手に腰を押しつけていく。

「うああっ、もっとして……あっ、あっ、樹里、もうどうなってもいい……ひいっ、狂わせて、このまま狂わせてぇっ」

白目を剝いて涎れを垂れ流し、ついに大声で泣き叫びながら昇りはじめる。

「出しますよっ、僕、うくぅっ！」

「ううっ、もう……出るっ！」

ふたつの穴に同時に灼熱の溶岩を注ぎこまれ、樹里の身体はまるで高圧電流を流されたかのようにガクガクと痙攣した。

「ひいいッ、熱い……イク、イクっ……イクうっ！」

目も眩むようなオルガスムスに脳髄を灼きつくされて、糸が切れた操り人形のように崩れ落ちる。

すると、すぐさまハイエナのように他の男子生徒たちが群がってきて、再び女壺と肛門に肉棒を突き刺されてしまう。

「うひいいッ、ああっ……入ってくるぅ」

さらに女子生徒たちまで寄ってきて唇を奪われたかと思うと、胸を揉みしだかれて

乳首に吸いつかれた。息つく暇もなく、あっという間に絶頂に連れ戻される。

「ダメ、もうダメ……ひンっ、あああっ、またイッちゃうっ！」

気が狂いそうな快楽に翻弄されて、しだいに意識が混濁していく。

すぐ隣りではエリカが大勢の生徒たちに輪姦されてよがり泣き、優弥は他の女子生徒と腰を振り合っている。剛志と秀夫もパートナーを次々と変え、淫行に耽っていく。

（もっと……もっとよ……もう少しでみんなの仲間に……）

樹里の虚ろな瞳には、もうなにも映っていない。ただ快楽だけを求めて、いつまでも腰をくねらせつづける。

生徒たちに自治権が任されている聖ラファエル学院では、基本的に教師が生徒たちの行事に口を挟むことはない。だから寮に誰も戻ってこないにもかかわらず、この異常な狂宴は深夜をすぎても発見されることはなかった。

いつしかラファエル大聖堂を満たしていた淫臭は、ステンドグラスの隙間から島全体へとひろがっていく。

「あっ、あっ……もっと奥まで……ひああっ、早く……早く狂わせてぇっ」

安息のときを求めて悶え泣きながら、樹里は途絶えることなく襲いかかってくる屹立を次々と呑みこんでいくのだった。